

教科担任制

谷 脇 光

1 小学校における外国語活動

今年度から高学年においては英語を「教科」として教えることになったが、八千代市においては、文部科学省の教育課程の特例校を申請し、小学校1年生から外国語活動を積極的に取り組んでいる。1年生は34時間、2～4年生は35時間、5・6年生は70時間実施している。

外国語活動が始まる以前の中学1年生は、ALTが話すたびに英語教師の通訳に頼り、楽しいというよりは緊張した表情だった。しかし、外国語活動が始まってからは、自ら積極的にALTに声をかけたり、自力で理解しようとしたりする姿が多く見られるようになり、外国語活動の目標である「慣れ親しむ」ことが生徒に浸透してきているのを実感する場面がたくさんあった。

外国語活動の導入当初、小学校の先生方が随分ご苦労されていたことを記憶している。今、外国語活動が軌道にのり、十分に英語に慣れ親しんでいる児童がいるのも、たくさんの良質な音声に触れさせ学習意欲を高め続けてくれた小学校の先生方のお力であると感じている。

2 英語教育における学級担任と教科担任の利点

八千代市では今年度4名の英語専科が4校の小学校で指導をしており、そのうち2名は特別免許を取得した外国人である。12名のALTを22校に派遣し、学校規模によって配置される日数は異なる。ALTに任せきりではなく、学級担任がT1、ALTがT2として指導している学校も多い。学級担任がT1で授業をする利点は、児童の実態をしっかりと把握した上で活動を考えることができることである。しかし、打ち合わせの時間が十分に持てず、ALTがT1で、授業が始まる前や授業中に相談している様子があるのも実際である。学級担任が基本であると考えられているが、英語が教科化された今、常に学級担任が中心という考え方を柔軟に考える必要がある。そうするとALTとの役割分担や指導内容と評価について、しっかりと計画を立てて打ち合わせしていかないといけない。

他の教科も指導している学級担任が英語の授業を行うということは、国語や社会など、他教科と関連づけた英語教育を行うのに適している。また、総合的な学習の時間におけるこれまでの蓄積を生かすことができる。また、学級担任は、教科担任よりも子どもの実態をよりよく理解しており、子どもとの心理的距離が近いという利点もある。児童との信頼関係を築ける人間という視点から考えると学級担任が基本である。

一方教科担任は、身近な生活・文化関係の語彙、基本的な文法など、英語に関して相対的に高い技能が期待できる。授業計画の立案や題材の選択等に関して内容が豊富なものを作成することができるなどの利点が考えられる。心理的距離の大切さを考えると、教科担任制を取り入れた場合でも普段から児童と関わっていることを重視した体制が求められる。

3 体験的な指導をするために

中学校の教科指導との大きな違いは、日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深める機会が多いというところにあると考える。日本と外国との生活・習慣・行事など、その違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くことや、異なる文化を持つ人々との交流等を体験し、文化に対する理解を深めることを低学年のうちから体験することに価値がある。八千代市内では、イメージ教育として、ALTがT1、または、学級担任がオールイングリッシュで図工・家庭科・体育の授業を行っている小学校がある。言葉による説明だけでなく、実物や絵を用いるなど視覚に訴える教材・教具を使用するだけで児童の理解は高まる。また、普段聞き慣れた英語に加えて、少し難易度の高い英語に触れることで、思考力や洞察力が向上するとも言われている。

中学生にアメリカの小学校の教材を使って帯活動を行っていたことがある。英語が苦手な生徒も、辞書で調べたり、既習事項を活用し想像して答えを導き出そうとしたりする姿を見ると、英語を教えるのではなく、異文化理解に関わるテーマやワクワクするような物語、生徒の知的好奇心を誘う「面白い事柄を英語で学ぶ」というコンテンツをベースとした授業が求められていると考える。

様々な英語の活動を通じて、英語に興味を持ったり、英語を道具や媒介として活用していく能力を習得していくことにつながったり、外国語を学ぶことの意義を理解させることで英語学習へのモチベーションにつながるのかもしれない。

4 新たな教育に向けての提言

新学習指導要領の外国語科では、動名詞や動詞の過去形も扱われるようになった。中学校で文法事項と呼ばれるものを小学校でも指導すると思われるかもしれないが、小学校においては、明確な状況でのコミュニケーションの中で繰り返し触れさせるということが大切である。指導において、動名詞や過去形に焦点を当てて文法事項として教え込む指導は避け、あくまでも慣れ親しむことを目指して指導をしていきたい。小学校で指導する先生方にとって、文法事項ということで専門性を求めるかもしれないが、具体的な使い方の定着や他の場面での活動などは、中学校の授業の指導の中で行われる。小学校での指導は中学校の授業の前倒しでないので、児童が繰り返し聞いたり話したりすることで意味を把握したり、活動を通して日本語と英語の語順の違いや文の構造に気づくような機会を増やしていきたい。